

教員養成課程における学校給食に関する指導の必要性

－食事マナーに焦点をあてて－

鈴木洋子

(奈良教育大学 家庭科教育講座 (家庭科教育))

中島明日香

(大阪市立旭陽中学校)

The necessity for learning regarding school lunch in teacher training course;
Focus on Table manners

Yoko SUZUKI

(Department of Home Economics education, Nara University of Education)

Asuka NAKAJIMA

(Osaka City kyokuyo Junior High School)

要旨：学校給食を通して児童生徒に食事マナーを身に付けさせるには、まず教員の意識を向上させる必要がある。そこで、教員志望の学生を対象に食事マナーに対する認識及び実態を調査し、これらの結果を参考に食事マナーチェックシートを作成し、その効果を検討した結果、チェックシートへの記入を通して、自己の食事マナーを振り返らせ、改善意識を高めさせ、給食での指導への自信を持たせるうえで効果的であることが確認できた。

キーワード：学校給食 School lunch
教員養成 teacher training course
食事マナー table manners
食事マナーチェックシート table manners check seat

1. はじめに

毎日の学校給食は児童生徒にとって仲間と食事をする楽しい時間であるとともに、「食」に関する様々なことを学ぶ重要な機会でもある。文部科学省の「食に関する指導の手引」には、給食指導が学級担任の仕事であることを明記したうえで、指導内容のひとつに「食事のマナーを身に付け、楽しく会食すること」をあげている¹⁾。

食事マナーを守ることで、お互いに不快感を与えず、気持ちよく楽しく食事をすることができるし、食前食後の挨拶は、人間のために命を提供してくれた動物や、生産・製造に携わってくれた人々への感謝の意を表わすことにつながる。このように相手への思いやりの表現として形成されてきた食事マナーには、その国の歴史や文化、宗教などが反映されている。換言すれば、食事マナーそのものが、食文化を形成していることになる。現在の日本は食の面でも国際化が進んでいることから、国際社会の一員にふさわしい食事マナーを身につけておく必要がある。食通として知られているブリア＝サヴァランの名言、「食獣は喰らい、人間は食べる。教養ある人にして初めて食べ方を知る」²⁾が意味するように、食事マナーは品格の一面をなすものでもある。従って、幼少のころか

ら発達段階に見合った食事マナーを身に付けさせることは、社会人の育成の一端を担うことにつながる。

先行研究により、親のマナー意識の有無が子どものマナーへの学びに影響することが明らかにされている³⁾。このことは、教員の食事マナーに対する意識が、その学級の児童生徒の食事マナーに影響を及ぼすことを示唆している。つまり、学校給食を通して児童生徒に食事マナーを身に付けさせるには、まず教員の意識と知識を向上させる必要がある。そこで本研究においては、教員志望の学生の食事マナーに対する認識及び実態を調査し、これらの結果を参考に食事マナーチェックシートを作成し、その効果を検討した。

2. 研究方法

2. 1. 教員志望学生の食事マナーに対する認識と実態 (チェックシート作成事前調査)

チェックシート作成の事前調査として、食事マナーに対する認識と実態を質問紙・集合調査法により 2014 年 7 月に実施した。対象は 2 大学の教員志望学生 96 人で、有効回答数は 94 人(97.9%)であった。

食事マナーの実態については 23 項目のマナーを具体

的にあげて、友達と食事をするときに自分が気を付けていることと、気になる友人の食事マナーの双方向から調べた。ここで採用した食事マナーは、「食に関する指導の手引」⁴⁾の他に、大学生を対象にした調査研究⁵⁾⁶⁾を参考に設定した。

2. 2. 食事マナーチェックシートの作成と実施及び、 チェックシート記入後の意識調査（チェックシート作成事後調査）

チェックシートは、先の事前調査で採用した 23 項目の食事マナーを基に、教員養成用のチェックシートであることを鑑み宇都宮市教育委員会の「食事マナー指導に関する手引」⁷⁾を参考に修正を加えた。

先の事前調査を実施した大学とは異なる 2 大学の教員志望学生 211 人を対象にチェックシートへの記入を依頼し、その直後に意識調査を行った。有効回答数は 203 人 (96.2%)であった。調査時期は 2014 年 10 月～11 月である。事後調査の内容は、シート記入後の改善意識と、児童生徒への指導に対する自信等である。

3. 結果及び考察

3. 1. 教員志望学生の食事マナーに対する認識と実態 (チェックシート作成事前調査)

食事マナーの必要性については、「必要と思う」が 95.7%、「どちらかという必要と思う」が 4.3%で、対象者の全員が食事マナーの必要性を認めていた。必要とする具体的な理由については (表 1)、「人に不快感を与えないため」が 26.6%、「礼儀であるから」が 24.5%、「常識だから」が 18.1%の順であった。具体的理由を「他者のため」と「自分のため」の 2 つに区分したところ、約 6 割が食事マナーを他者への配慮と捉えていることがわかった。

食事マナーの定着 (マナーが身に付いているか) については 78.7%が肯定的な回答をしていた。しかし、肯定的な回答のなかで、自分の食事マナーを「正しい」と認識している者は 6.8%しかおらず、「やや正しい」が 63.5%、「正しくない」は 27.0%と、自身の食事マナーに自信がない様子が伺えた。

各食事マナーに対する実態を調べるために、23 項目の食事マナーをあげて、友達と食事をするときに自分が気を付けていることを「既に身に付いている」「気を付けている」「気を付けていない」の 3 段階で回答を依頼した (図 1)。「既に身に付いている」と「気を付けている」を併せて 9 割を超えていたのは「くちやくちや音を立てない」「いただきますを言う」「ごちそうさまを言う」「犬食いをしない」「咳・くしゃみをするときに手で口を押さえる」「箸を正しく使う」であった。逆に、「気を付けていない」

の回答が多かったマナーは、「一緒に食べている人に速さを合わせる」「前かがみ、猫背にならない」「脚を組まない」「利き手ではない手の位置・使い方」であった。これらの結果より、他者に不快感を与える行為については気を付けているが、食べる速さや自分の食事時の姿勢については関心が低い傾向にあることがわかった。

図 2 は友達と食事をするときに気になる友達のマナーを調べた結果である。採用したマナーは図 1 と同様である。8 割以上が気になるとしていたマナーは、「くちやくちや音を立てる」「咳・くしゃみをするときに手で口を押さえない」「口に物が入ったまま話す」の生理的、衛生的に不快な思いに繋がるマナーであった。逆に気にならないマナーは、「一緒に食べている人に速さを合わせない」「前かがみ、猫背になる」「利き手ではない手の位置・使い方」「ひじをつく」で、先の自分でも気をつけてないマナーに相当する内容であった。「くちやくちや音を立てる」「咳・くしゃみをするときに手で口を押さえない」は、図 1 の自分が気を付けているマナーにおいても上位にあった。その中で、「口に物が入ったまま話す」は、自分が気を付けている以上に他者の行為が気になるマナーであることがわかった。その一方において「脚を組む」「一緒に食べている人に速さを合わせない」「前かがみ、猫背にならない」のマナーは、自分でも気を付けていないし、他者の行為でも気にならない傾向にあることがわかった。これらの結果から、友達と食事をするときに自分が気を付けているマナーと、気になる友達のマナーは同傾向にあり、生理的・衛生的面において他者に不快感を与える行為については配慮しているが、食事時の姿勢や食べる速さについては関心が低い傾向にあることがわかった。

表 1 食事マナーを必要と思う理由

| 理由 注1) | | 人 | % | 人 | % |
|-----------------|----------------------------------|----|-------|----|-------|
| 他者のため | 人に不快感を与えないため | 25 | 26.6 | 60 | 63.8 |
| | 礼儀であるから | 23 | 24.5 | | |
| | 感謝の気持ちを表すため | 12 | 12.8 | | |
| 自分のため | 常識だから | 17 | 18.1 | 32 | 34.0 |
| | 気持ちよく食べるため | 10 | 10.6 | | |
| | 恥ずかしいから | 4 | 4.3 | | |
| | 伝統(食文化)であるから | 1 | 1.1 | | |
| その他 注2)、 無回答 | 社会的基盤を小学校で身につけ、 習慣にしないといけないため | 2 | 2.1 | 2 | 2.1 |
| 合計 | | 94 | 100.0 | 94 | 100.0 |

注 1) 理由項目には選択肢を設定した。

注 2) その他の項目は回答者の記述。

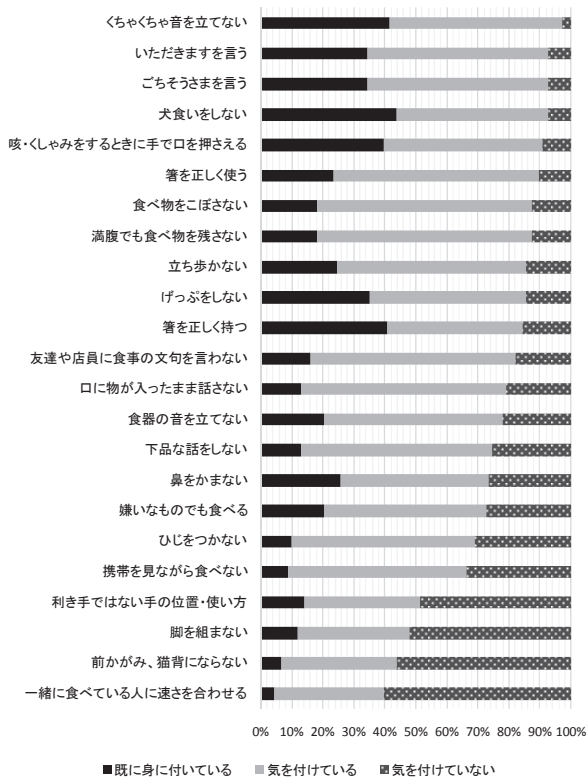


図1 友達と食事をするときに自分が気を付けている食事マナー

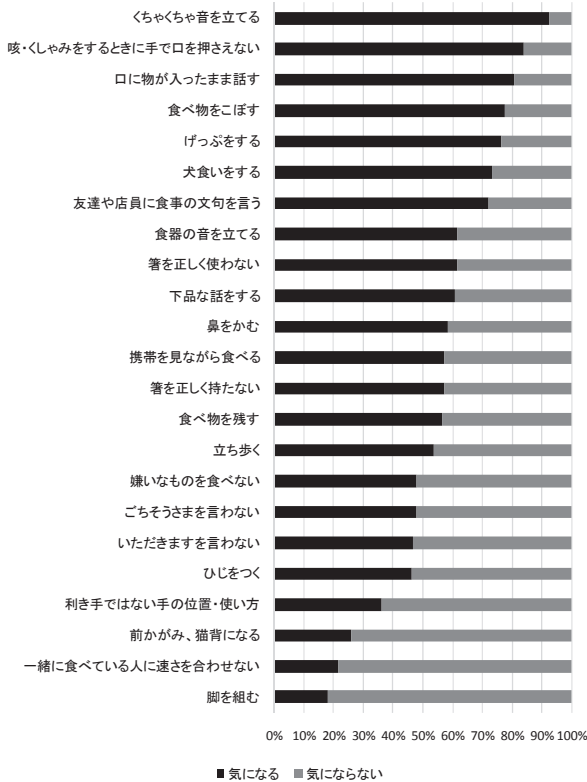


図2 友達と食事をするときに気になる友達の食事マナー

3. 2. 食事マナーチェックシートの作成

事前の調査を基に、チェックシートを作成した(表2)。先の調査で箸については「箸を正しく持てない」と「箸を正しく使えない」の2項目で、そのうち「箸を正しく使えない」の方に回答が多かったことから、チェックシートにおいては箸の使い方限定し、文部科学省の「食に関する指導の手引」を参考に「迷い箸」「涙箸」「刺し箸」「持ち箸」「寄せ箸」の誤った箸の使い方の5項目とした。また、先の調査の「下品な話をしない」と「友達や店員に食事の文句を言わない」は「食事中にふさわしい話題で会話をする」にまとめた。さらに「鼻をかむ」は削除した。

表2 食事マナーチェックシート

自分の普段の食事の様子を思い出して回答してみましょう。それぞれの項目に対して、該当する欄に○を付けてください。

| | 意識せずに、できている | 意識して、できている | 意識しているが、できていない | 意識していないし、できていない |
|----------------------------------|-------------|------------|----------------|-----------------|
| 脚を組まない | | | | |
| ひじをつかない | | | | |
| 背筋は伸ばし、前かがみ、猫背にならない | | | | |
| 利き手でない方の手で茶碗や汁椀を持ちながら食べる | | | | |
| 口に食べものが入ったまま話さない | | | | |
| 食事中は携帯を見ない | | | | |
| 食事にふさわしい話題で会話をする | | | | |
| 食事中に立ち歩かない | | | | |
| いただきます、ごちそうさまを言う | | | | |
| 一緒に食べている人に速さを合わせる | | | | |
| くちやくちや音を立てない | | | | |
| 食器の音を立てない | | | | |
| ご飯粒なども残さず食べる | | | | |
| 嫌いなものでも食べる | | | | |
| 犬食い(食器に顔を近づけて食べる)をしない | | | | |
| げっぷをしない | | | | |
| こぼさず食べる | | | | |
| 咳・くしゃみをするときに手で口を押さえる | | | | |
| 迷い箸(どれをたべようか、迷って箸を動かすこと)をしない | | | | |
| 涙箸(遠くからはさんで汁を垂らしながら、箸を動かすこと)をしない | | | | |
| 刺し箸(箸で食べ物をさして、食べること)をしない | | | | |
| 持ち箸(箸を持ったまま、食器を同じ手でもつこと)をしない | | | | |
| 寄せ箸(箸で食器を寄せること)をしない | | | | |
| ○の合計数 | つ | つ | つ | つ |

3. 3. 食事マナーチェックシート記入後の意識調査(チェックシート作成後調査)

図3にチェックシート記入後の食事マナーに対する改

善意識を示した。「改善しようと思った」が約 8 割を占め、シートへの記入を通して多くの学生の改善意識が高められたことが確認できた。

表 3 に食事マナーチェックシート記入後に自分のマナーを改善しようと思った理由を示した。表中の「%」は、全回答者 203 人に対する割合を示している。「よくできていたが」と「できないことがわかり」の 2 グループにわけて集計した結果、「よくできていたが」の項目に回答した学生、つまり、さらに向上したいと思っている学生が全体の 5 割弱であることが分かった。その中でも「よくできていたが無意識でもできるようにしたい」が全体の 23.3%で、これらの学生については向上心の高さが伺えた。また、「できないことがわかり恥ずかしいと思ったから」の選択肢は、食事マナーを社会人の常識として受けとめている学生たちで、全体の 20.7%の回答であった。なお、改善しようと思わなかった理由で最も多かったのは「できていなかったが現状で十分だと思う」の 4.9%で、マナーに対する向上心を持たない学生になる。「よくできていたので改善しようと思わなかった」の回答は全体の 3.9%であった。

食事マナーを指導する自信の有無について調べた結果、「自信がある」が 55.2%、「自信がない」が 41.9%であった。図 4 に「食事マナーを指導する自信がある」の理由を示した。「できている項目だけは指導できる」が全体の 14.8%で最も多い回答であったが、この回答からは指導に対する向上心を伺うことが出来ない。また、「以前から教師になったら食事マナーを指導したいと思っていた」は全体の 6.9%で、以前より給食指導における食事マナーを意識していた学生が少ないことがわかった。しかし、「食事マナーに関心を持てたから」11 人、「よくできていたことがわかり自信になった」11 人、「食事マナーを指導することに責任を感じたから」9 人、「できていない項目は改善すれば指導できる」10 人の総計 41 人（全体の 20.1%）については、チェックシートへの記入が指導への自信に何らかの影響を与えたことが推察できる。なお、「食事マナーを指導する自信がない」の理由で、「知識に不安がある」の回答が全体の 24.6%であったことから、正しい知識の定着が指導への自信に繋がることが確認できた。

図 5 に教員志望学生が給食指導を通して指導したいと捉える食事マナーを示した。「必ず指導したい」で上位を占めていたのは「いただきます、ごちそうさまを言う」、「ご飯粒なども残さず食べる」、「くちやくちや音を立てない」、「咳・くしゃみをするときに手で口を押さえる」であった。「余裕があれば指導したい」で回答が多かったのは「背筋を伸ばし、前かがみ、猫背にならない」、「食器の音を立てない」、「迷い箸をしない」であった。よい姿勢で食事することは、見た目の美しさだけでなく、食べ物の消化にも影響する点から疎かにできないマナーである。逆の「指導しない」で最も回答が多かったのは、「一緒に

食べている人に速さを合わせる」で、他の項目より突出していた。このマナーは、先の事前調査においても、自分も気を付けていないし、他者の行為でも気にならない割合が高かったマナーである。これらの結果より、自分が気を付けているマナー、すなわち他者の気になるマナーしか指導しようとしなかったことが明らかになった。

作成した食事マナーチェックシートには、生理的・衛生面に関するマナーと共食を意識した社会面でのマナーに、自己の品格を高めるマナーを網羅してある。学生の意識が低かった「一緒に食べている人に速さを合わせる」は、社会的な食事マナーに入る。食事時の姿勢や箸使いは、品格につながる。今回の調査から、学生の時点で意識されていないマナーが、そのまま給食での指導で疎かになりがちになることが確認された。食事マナーチェックシートへの記入が、様々なマナーを知る契機となると考える。

以上のチェックシート記入後の調査結果から、チェックシートへの記入により、自己の食事マナーの振り返えりを通して改善意識を高めさせ、給食での指導への自信を持たせるうえで効果的であることが確認できた。

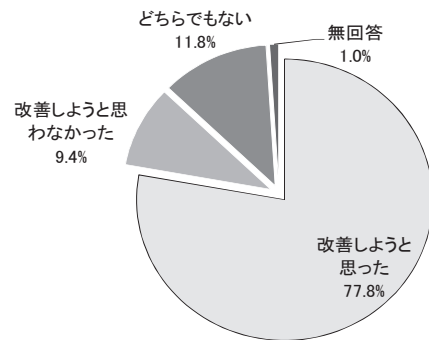


図3 チェックシート記入後の食事マナーに対する改善意識

表3 食事マナーチェックシート記入後に自分のマナーを改善しようと思った理由

| | | 人数 | % ^{注)} | 人数 | % ^{注)} |
|--------------|-------------------|----|-----------------|----|-----------------|
| よくできていたが | もっと完璧にしたい | 31 | 15.3 (19.6) | 93 | 45.8 (58.9) |
| | 無意識でもできるようにしたい | 47 | 23.2 (29.7) | | |
| | 他人からも認められるようになりたい | 15 | 7.4 (9.5) | | |
| できていないことがわかり | 恥ずかしいと思ったから | 42 | 20.7 (26.6) | 64 | 31.5 (41.1) |
| | 危機感を感じたから | 4 | 2.0 (2.5) | | |
| | 食事マナーの必要性を感じたから | 18 | 8.9 (11.4) | | |

注) 上段は全回答者 203 人に対する割合。下段 () は、改善意識がある 158 人に対する割合。

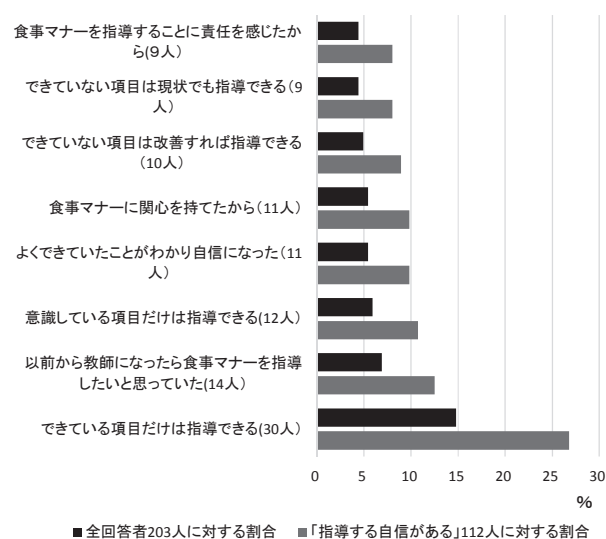
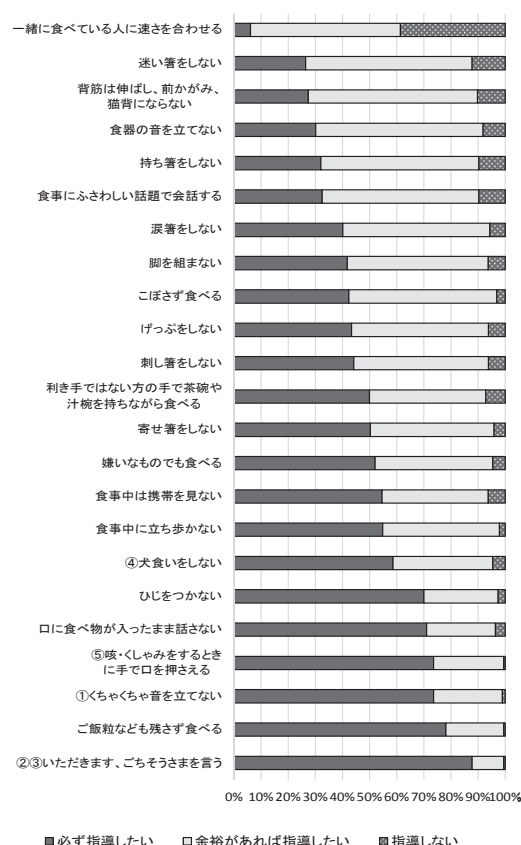


図4 「食事マナーを指導する自信がある」の理由



注) 項目中の○数字は「図1 友達と食事をするときに自分が気を付けている食事マナー」の上位5項目である。

図5 教員志望学生が給食指導を通して指導したいと捉える食事マナー

4. 要約

学校給食を通して児童生徒に食事マナーを身に付けさせるには、まず教員の食事マナー意識を向上させる必要があることから、教員志望の学生の食事マナーに関する認識を調査し、これらの結果を参考に食事マナーチェックシートを作成し、その効果を検討した。

その結果、チェックシート作成前に実施した認識調査からは、約6割の学生が食事マナーを他者への配慮と捉えていることがわかった。また、約8割の学生が食事マナーを身に付けていると認識しているが、その正しさについては確かな自信を持っていないことがわかった。

実態については、友達と食事をするときに自分が気を付けているマナーと、気になる友達のマナーは同傾向にあり、衛生面や他者に不快感を与える行為については配慮しているが、食事時の速さや姿勢については関心が低い傾向にあることが分かった。

チェックシート記入後の事後調査からは、チェックシートへの記入を通して食事マナーへの改善意識が高められたことが明らかになった。食事マナーを指導する自信については「自信がある」が、「自信がない」を若干上

回る結果であったが、チェックシートへの記入が指導への自信に効果的であることがわかった。しかし、学生らが積極的に指導しようと捉えている食事マナーは、自分が気をつけているマナー、すなわち他者の行為で気になるマナーであって、自己の意識が低いマナーについては指導へも消極的であったことから、多様なマナーの必要性を意識して給食指導にあたるうえで、今回作成した食事マナーチェックシートは有効なツールであると考ええる。

引用文献

- 1)文部科学省、(2010)、食に関する指導の手引ー一次改訂版ー、p 200・203
- 2) ブリア＝サヴァラン、関根秀雄（翻訳）、(1996)、美

- 味礼讃、白水社、p12
- 3)渡辺豊子他、(2009)、女子大生の親子世代間におけるマナー意識と行動ー影響する要因の検討ー、日本家政学会誌 Vol.60No2、pp163 ～176
- 4)前掲 1)pp214-215
- 5)前掲 3)
- 6)荒井三津子他、(2007)、現代の食事作法ー家庭の教育と新しい方向性ー、北海道文教大学研究紀要第 31号、pp43-54
- 7)宇都宮市教育委員会、食事マナー指導に関する手引、2012、II 章、p44～p47
<http://www.ueis.ed.jp/school/gakken/1-shokunikansur-usidou/pdf/manar-tebiki.pdf>、2015